
黒砂糖の夏

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒砂糖の夏

【Nコード】

N8358A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

一本の知らせを受けてずっと離れていた故郷へ帰ることとなった。

「もしもし、浩一？」

母からの知らせを受けて、ずっと離れていた故郷へ帰る事になった。

空港へ着いてすぐ、小袋に入った黒砂糖を1つ買った。

小さい頃、沢山食べた黒砂糖は、今では浩一が唯一苦手とする食べ物となってしまった。それでも祖母の姿を思い出す時、菓子箱に入っているのは黒砂糖くらいだ。

毎年夏になると、海辺の祖母の家によく泊まったものだ。顔を見る度に菓子箱を開け、掌に乗せてくれた黒砂糖と祖母の笑顔が浩一は好きだった。懐かしいような甘い薫りは幼心を惹き付けた。『もっと食べたい』そんな欲から一度だけ祖母の目を盗んで黒砂糖を食べた。その後すぐに押し寄せた食べ過ぎによる気持ち悪さと闘いながら、祖母が怒るでもない、どこか悲しみに似た表情で水をくれたのを覚えている。

あれからもう、黒砂糖は口にしていない。匂いだけでも吐気がして、すっかり体が受け付けなくなってしまった。

それでも祖母は菓子箱を開け、断られては寂しそうな微笑を浮かべていた。まるで自分に言い聞かせるように『浩一も大きくなったからねえ。』と呟く祖母を見て、複雑な思いがした。

中学、高校へと上がるにつれて祖母の家へ行く機会は減り、祖父が亡くなってから痴呆が入り始めた祖母は、浩一が就職のため名古屋へ飛ぶ前の日に、黒砂糖を持ってきた。祖母の中の浩一はいつまでも黒砂糖の好きな愛孫なのだ。そこで祖母との時間は止まっていた。

母は誰が食べるでもない黒砂糖を、隣のお婆さんにあげる事を思い付いたが、浩一は袋を開けもしないまま家に置いた。考えてみれば、黒砂糖とお茶の時間は祖母と浩一を繋ぐ数少ない接点だったの

かも知れない。だから余計、そのままにしておきたかった。

それからあつと言う間に4年が過ぎた。家の黒砂糖は消え失せていた。変わらないのは曖昧な記憶だけで、そのままにしたかった事は何も残っていなかった。

祖母は死んだ。

食事中に急に倒れ、1時間足らずで逝ってしまったらしい。もし、死ぬ間に居合わせていたら、祖母はきっと寂しそうな表情をしていただろう。最後に会った夏のある日はおぼろ気で、それ以外の表情は思い付かない。

…ずっと帰らなくてごめんね。

アルコール臭の部屋は祖母の家とはかけ離れていて、真っ白い世界が…何も無い世界が…ただ広がっていた。

買ってきた黒砂糖をそつと口に運ぶ。甘い懐かしい匂いが少し煙たいけれど、一番小さな欠片を受け入れる。途端に胸の奥から酸っぱさがせり上がる。視界が滲む。わざとらしい程白いシーツを握り締めながら、嗚咽とともにやってくる苦しさに堪える。

名古屋へ旅立つ前に、黒砂糖が好きだった頃の自分に還って、祖母に『ありがとう』と言う事が出来なかった。

涙が頬を伝って顎から落ち、着慣れたワイシャツを濡らした。

（後書き）

私の今は亡き祖母は、黒砂糖が大好きでした。私に勧めては、いつも断られて祖母はなんだか寂しそうでした。最後までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8358a/>

黒砂糖の夏

2010年12月22日14時31分発行